

松下幸之助に学ぶ!!

文・全国PHP友の会

会友 梶浦 洋一

(徳島PHP友の会顧問)

(H/PPHAG&

『菜根譚の会』世話人)

『人間の心』

第四回(完)

安倍首相の訪米も終わり、通常国会での政府・与野党の論戦が激しくなってきたかに見える。

しかし、駆け引きの多い「テロ等準備罪」や南スーダ

ンへの自衛隊員海外派遣中での「言動問題」。また文科省の「違法天下り再就職問題」など、長期政権下の「ゆるみ」や「不勉強」は、緊張感に欠ける担当大臣答弁を

聞いていても程度の低さに情けなくなる。また、首都東京の都政「ていらく改革」に纏わる話もますます連日喧しくなってきた。

スタートして二カ月の米国ランプ大統領の支持率は四五%と低く、「混乱」と「分断」と「焦り」で話題も事欠くことがない。連日マスコミを賑わせている。そこへ北朝鮮関連の「暗殺事件」

が惹起されて、これも俄かに衆目を集めている。やはり、酉年は鳥が羽ばたきバタバタと気ぜわしく右往左往することが多くなるのかな?!

さて、本誌が今月号で廃刊になるという。そこで『縁』の不思議さと有難さを想起

しつこく言。

「当初、(株)ブレンバンクをはじめた若人が冊子発行に勤しんでいた。応援しようとして【松下幸之助に学ぶ】の投稿を始めたのが【エコジヤ】との『縁』の始まりであった。その後、ブレンバンクが徳島中央テレビ(株)傘下に移り【エコジヤ】は永続発行となり拡充した。これも有難い感謝すべき『縁』のはじまりであった」。

話題を先月号のアチーブメント(株)青木社長とPHP研究所の佐藤専務の語らいに戻そう。

苦労した分だけ
思いは強くなる

松下幸之助は、若いとき

から感謝の気持ちを持ちながら社員に接していたところ、人は思いも寄らない力を発揮してくれることに気がついた。そういう人をたくさん見てきたことで、幸之助は、人はみなダイヤモンドの原石のようなものだ、磨けば磨くほど輝く素質、無限の可

能性を一人ひとり全員がもっているという人間観を得るに至った。

そして、その人がもっている素質や可能性をいかに磨いてあげられるか。自分自身も含めて、それぞれを磨きあうことのできる環境をどうつくるかが経営者の役割であり、事業の目的だと思ふようになった。

ですから事業そのものを大きくするというよりも一緒に集まった社員の人たちがみずからの能力を発揮し、生きがいややりがいをもって仕事に取り組めるようにするにはどうしたらいいのか、その一点に集中して、様々な改革に取り組んだと佐藤専務が説明したのに、青木社長は応じた。

青木社長

「たとえばガラス張り経営(*幸之助は個人経営の時代から家計と店の会計をはつきり区別した。松下電器の経営も創業時からその実態を内外に明らかにし、秘密のない経営を行なってきた)や、適材適所の経営、衆



知を集めた全員経営、自主責任経営など、幸之助さんが重視した経営手法はさまざまありますが、どれもその人がどうしたら気持ちよくやりがいをもって働けるのかという、その思いから生まれてきたものだと思えていいのかも知れません。」

佐藤専務

「そうですね。社員にすれば、情報を全部オープンにしてもらったり、自分の適性を生かせる場所に配置してもらえたらやりがいを感じますし、自分の提案を取り入れてもらえればうれいでしょう。強制されてやらされるのではなく、自主的に責任をもって仕事をするこ

とで、意欲もわいてきます。幸之助がそんなふう社員のためにいろいろなことを考えたのは、先ほども言ったように、人が集まらなかつた創業当時、ようやく自分の会社に来てくれて働いてくれた社員に対する感謝の気持ちがあったからです。経営者であれば多かれ少なかれ、社員のことを思っている

でしょうが、心の底からそう思っているのか、それともそうやった方が会社が大きくなるからという「手段」としてそう思っているかの違いは大きいと思います。

おそらく社員には幸之助が本当に自分のことを考えてくれているという実感があつたに違いありません。幸之助が心底社員の幸せを思っていたからこそ、社員の方も幸之助のためなら死んでもいいという人がいっぱい現れたのです。」

●『思いの強さが人生を左右する。願望を実現するためにまずは思うこと。』

紙面の残りが僅かとなってきた。纏めに入ろう。

人間をどうとらえるか

世の中で戦争や対立、憎しみが生まれるのは、人間をどう見るかという人間観の問題だと松翁は説いた。人間の本質に基づいた正しい人間観が存在してないから、争いが起きるのだと幸

之助は考えた。

もちろんこれまでにも様々な人間観があつた。性善説、性悪説がその代表だが、ほかにも仏教やキリスト教など、人間観を示した考えはいろいろあつた。いろいろあるけれども、争いはなくならないですつと続いている。だから幸之助は世の中を繋ぎ、平和、幸福に導くために、『新しい人間観』が必要だと説いたのである。

●『新しい人間観の提唱』にすべては集約されている。

経営についてはもちろん、幸之助の生き方のすべてのベースにこの人間観がある。要は人間をどう見るかという基本的な考え方の問題である。人間は一人ひとり磨けば光る無限の可能性をもつた存在であり、宇宙根源の力からみんな違った天分を与えられてこの世に生みだされてきているというのが幸之助の考え方である。

この世に二人として無用の人はいない。一人ひとりが宇宙根源の力から与えられた

天分をもっているのだから、それを早く見つけ出して發揮させてあげないといけない。幸之助はそのために人づくりをしてきたといつてもいいだろう。

幸之助はこの新しい人間観が人類を救うと本気で思っていた。五〇〇年ぐらい経ったら、また新しい人間観が出てくるかもしれないが、少なくともここ数百年はこの考え方でいけるはずだという自負心をもっていた。

ちなみにこの新しい人間観は幸之助の『人間を考えると』(PHPビジネス新書)という本にしたためられている。幸之助はこの本を二万回読んでほしい、と言っていた。一回や二回読んだくらいでは解らない。『読書百遍自ら通ず』といわれるがさすがに二万回は無理だろうが、でもそれくらい繰り返し読んではほしいというのが松翁の本心であつた。

特に注目すべきは、この本は自分が書いた本ではない。天来の声、天からの声だからだと言っていたといわれて

いる。著者松下幸之助と記してあるから、大した本ではないと、たかを括るのは大間違いだ。これは天来の声で、一〇〇年なり、二〇〇年なり後には床の間に置かれる本だと言っている。

「宇宙に存在するすべてのものは、つねに生成し、たえず発展する。万物は日に新たであり、生成発展は自然の理法である。」

人間には、この宇宙の動きに順応しつつ万物を支配する力が、その本性として与えられている。人間は、たえず生成発展する宇宙に君臨し、宇宙にひそむ偉大なる力を開発し、万物に与えられたそれぞれの本質を見いだしながら、これを生かし活用することによって、物心一如の真の繁栄を生み出すことができるのである。

かかる人間の特性は、自然の理法によって与えられた天命である。」

この言葉を信じるか否かで貴方の生き方は変わるのだが、果たして…。

(完)